

シノプシス

● 作品評価:原著発行の現地での評判、売れ行き

がん治療の過程で著者と同様に医療の不当や過誤を経験し、つらさを味わった患者や家族たちの共感を得て、著者あてには毎日のようにメールや手紙が届いている。地元カナダのハリファックスの新聞 **The Chronicle Herald** 紙で、(巨人に一人立ち向かう) **ダビデとゴリアテ**の物語であり、ドラマ、ミステリー、喜劇、サスペンス、研究という多くの側面をもつ、読み出したらやめられない一冊、きわめてよく書けたすばらしい物語であると評された。本書を読んだ米国モンタナ州の内科専門医 **Dr. James Legan** は、2014年11月、シカゴの学会プレゼンテーションで本書を症例研究の題材とし、診療に患者が参加することの必要性を説いた。

International Book Awards 2015 健康・がん部門のファイナリストに選ばれる。

Association of Independent Authors によって **Book of the Month selection** に選ばれる。

Readers' Favorite Award ファイナリストに選ばれる。

● 作品の市場性：日本に類書はあるか。類書は売れているか。または類書がないので売れる可能性があるのか。

がんの闘病記は多いが、本書のように患者が医療のベストプラクティスを求めて周囲を巻き込んで闘い、結果を出すという内容は類をみないと思われる。また米国の医療事情は日本でもかなり知られているが、カナダの事情はあまり知られておらず、その実情や日本との違いにも驚かされる。医療従事者にも患者にも啓発的な内容でありながら、そのストーリー展開は上記の新聞の書評にあるように読み出したらやめられない。売れる可能性は非常に大きい。

● 読者ターゲット：年齢、性別、職業など

男女を問わず、がん患者、その家族や関係者、がん治療に携わる医療従事者がターゲットだが、幅広くそれ以外の医療従事者や医療政策に携わる人々にも勧めたい。

1. タイトル

The Cancer Olympics

2. 出版社・刊行年

Friesen Press (カナダ) 2014年

3. 著者紹介

Dr. Robin McGee は、カナダ東部のノヴァスコシア州ポートウィリアムズ在住の公認臨床心

理学者、母親、妻、教育者。25年以上、保健・教育の場で臨床家をつとめている。大学レベルでの教職、専門である小児心理学の分野で専門誌に執筆の経験がある。疾患寛解となつてから、患者擁護活動に活発に携わり、がん標準治療改善をめざす州と国のプログラムの患者代表をつとめる。カナダがん学会で、患者ピアサポートのメンターとして、資金調達担当（本書の売上の半分は学会に寄付される）としても活動。2015年、カナダがん学会の最高栄誉賞である **National Medal of Courage** を受賞。

4. 内容要点

The Cancer Olympics は、著者の最初の、そして望むべくは最後のがん体験の回想録。一人称現在形で語られる。タイトルの **The Cancer Olympics** は、がんの治療を五輪種目にたとえて闘病する著者の意気込みかつユーモアでもあり、著者が友人や支援者のためにつくった内輪の SNS の名前 **Robin's Cancer Olympics** にも使われている。病と闘っただけでなく、最良の治療を求めて医療界、政界とも闘い、心理学者、文学者としても深い考察を行った。

5. 各章のあらすじ

第1章

最初の異変から結腸直腸がんと診断されるまでの嵐の 22 ヶ月

Robin はカナダ、ノヴァスコシア州に住む 47 歳の臨床心理学者。家族は夫 **Andrew** と 10 代の息子 **Austin**。小児専門の心理学者として地元の教育委員会で働き、小規模に開業もしている（カナダでは、臨床心理学者は博士号をもち、診断をくだし、開業もできる）。2008 年 6 月 26 日、下血を経験。初めに家庭医の代診 **Dr. Number One**、2008 年 10 月に家庭医 **Dr. Number Two**、2009 年 1 月に（**Dr. Two** が診療所を閉じたため）次の家庭医 **Dr. Number Three**、2010 年 2 月に外科医 **Dr. Number Four** に診察を受ける。その間、症状の悪化を訴え、大腸がんの家族歴があることを伝えるが、どの医師も軽く捉えて心配ないと言う。2010 年 5 月 6 日ようやく内視鏡検査を受ける。8 日後、進行した結腸直腸がんとの診断を受け、放射線、化学療法、手術が必要だと言われる。この間に、検査の手違い、連絡ミス、内視鏡検査のために不必要に長い待機をさせられたこと等がわかり、悲嘆と怒りのうちに自分が医療の不始末という最悪の嵐の中にいたことを知る。

第2章

がん患者として歩み始める

勤務先、親きょうだい、息子に自分ががんであることを知らせる。義父の **Ron** は、末期食道がんでなすすべがなく、最後の別れの時を迎えるが、**Robin** は会いに行かれるのだろうか。**Dr. Number Four** ではなく直腸がんの専門家を探し、**Dr. McIntyre** に手術をしてもらおうと決心する。ノヴァスコシアがんセンターに通院することになり、診察の結果、カリブ海の島に住む **Ron** に会いに行けることになる。

第3章

末期食道がんの義父と最後の時を過ごす

Robin 一家、Andrew の姉妹らの家族が島に集まる。美しい島の風景と皆の悲しみ、衝撃との対比。ある朝、Robin は大量の腔出血を経験し、島には医療施設がないことに気づく。その晩、Robin の出血は止まったが、Ron の出血が始まった。Ron は、家族と共にここで過ごしたいと救急隊員に入院を断る。皆を空港に見送りに来た Ron は Robin を励ます。これが Ron との別れとなった。

第4章

腫瘍内科医 Dr. Dorreen の診察

がんとは深い泥の穴に落ち込んで逃れられないようなもの。檻に入れられた動物のように受容と怒り・恐れの間を行ったり来たりする。悪夢に悩まされる。痛みが増し、便が細くなり、出血も大量となる。がんセンターで腫瘍内科医 Dr. Dorreen の診察。手術前にできるだけ腫瘍を縮小させるため、化学放射線療法をすることになる。

第5章

Robin's Cancer Olympics を立ち上げる

Robin の病気を知った友人、同僚などから援助の申し出、贈り物、花などが続々と届く。同僚の一人がオンライン・サポート・サイト Lotsa Helping Hands を教えてくれる。ここに内輪だけの SNS を立ち上げ、サイト名は Robin's Cancer Olympics (RCO) とする。2010年6月4日、最初の投稿。数日のうちに反響があり、RCO コミュニティのメンバーは200人を超える。

第6章

外科医 Dr. McIntyre の診察

自分が診ていた患者を仲間の臨床家に引き継ぐ。誇りであった開業臨床心理学者としての仕事を手放し、もう職業人としての人生は終わったと思う。3日間便通がなく出血もひどく、がんセンターで緊急手術が必要かもしれないと言われるが、Dr. McIntyre に翌日診察してもらえることになる。診察後、緊急手術ではなく、別の方法があるという。その方法を実行し、化学放射線療法を終えた後に手術するほうが予後がいいというのだ。なすべきことを知っている信頼できる医師にようやく巡り合えた。

第7章

化学放射線療法という種目が始まる

2010年6月14日、明日から(外来)化学放射線療法が始まると RCO に投稿。所属するサ

サッカーチームで獲得した MVP シャツを着ていく。まず点滴用ラインを付けるが、血に弱い Andrew は処置室に付添えない。次いで薬剤ボトルを接続。その後は放射線。Andrew は、介護のために仕事をやめなければならないのだろうか。

第 8 章 化学療法の日々

がん患者になって、私人から注目の悲劇の人物となる。多くのアドバイスや代替医療の勧めなどが押し寄せる。流動食もつらく、飢餓感に悩まされる。RCO のメンバーが、運転、庭仕事などのボランティアを買って出してくれ、サイトに寄せられるメッセージにも支えられる。2010 年 7 月 12 日、義父 Ron が死亡。

第 9 章 最初の 4 人の医師を告発

友人の紹介で新たな家庭医 Dr. Good に会う。不始末だった Dr. One から Four をノヴァスコシア医師会 (CPSNS) に告発することを考える。そんなことをしたら今後の治療に支障が生じるのではないのか、しかしもし黙っていたらこのようなことが繰り返されるのでは、と悩む。CPSNS に手続きについて電話すると、そっけない対応を受ける。これがきっかけとなって、全力で闘おうと固く決意。何週間もかけて 4 通の告発状を作成し、CPSNS に提出する。

第 10 章

化学放射線療法という種目終了

2010 年 7 月 23 日、化学放射線療法を終了。放射線の副作用である熱傷が生じる。また腫損傷・癒着も起こる。義父 Ron の遺灰を模型の船に乗せて海へ送り出す。

第 11 章

手術という種目

手術を控え、北極やアマゾンなどでたった一人道に迷った人や岩に挟まれた腕を自分で切り落として生還した人の物語を思い浮かべる。生き延びるためなら身体の一部を切り落とせるだろうか。少なくとも、手術には外科医がいるし全身麻酔もある。受容と決意をもって臨もう。自分の中にたくさんの Robin がいる。職業人としての Robin、母親としての Robin、サッカーをする Robin など。恐れる Robin も仲間に入れてあげよう。

第 12 章

手術は成功、しかし退院後に待っていた苦痛

2010 年 9 月 14 日、夫 Andrew が投稿。手術成功、他にがんはなし、容態は良さそう。身体を探ってみると恥骨から臍までの切開創、ストーマ (人工肛門) があるのがわかる。退院するが、訪問看護師が腹部の片側が腫れているのを心配する。夜中に苦痛で目が覚める。

第 13 章

腸閉塞で ER へ

朝になると嘔吐がひどい。診療所は休みだったが Dr. Good が往診してくれた。最悪の医療の後にこうして最良の医療を経験するとは。小腸のよじれによる閉塞で入院が必要。すぐ ER に向かうが、その日の待機医は Dr. Four だという……

第 14 章

告発状に対する 4 医師からの反応

書面で 4 医師はそれぞれに弁明を述べていた。特に仕事上の同僚だった Dr. Two と Three は自分を一人の人間として見てくれるものと思っていたのが、裏切られたような感じ。しかし、これに負けるものかと生きようという意志がかきたてられた。

第 15 章

病理検査の結果

結果は思っていたより悪く、検査した 9 つのリンパ節のうち 4 つが陽性で、ステージ IIIC だった。尿検査を受けた診療所の Dr. Wellwood が好意と人としての思いやりを示してくれ、これまでに経験した医療従事者の無関心との対比に驚く。

第 16 章 化学療法という種目が始まるが FOLFOX が使えない

残ったのは、術後科学療法という種目。カナダ大腸がん学会に問い合わせるとほとんどの地域で標準治療は 3 剤併用の FOLFOX だとわかる。しかし、この療法はノヴァスコシア州では直腸がんに対して承認されておらず、実施できないと告げられる。代わりにゼローダ錠を受け取る。

第 17 章

ゼローダ錠による治療

カナダにはがん治療の国としての基準はないと知って驚く。オンタリオ州あるいは米国へ引越せば FOLFOX 療法が受けられるのか？ この療法が優れていて生存の確率が高いことを知るにつれ、どうしても受けたい思いが募る。ストーマについての悩みは、あまりにもプライベートで、RCO の仲間にも率直に言うことはできない。

第 18 章

FOLFOX 承認にはロビー活動が有効？

ノヴァスコシア州で直腸がんに対して FOLFOX を承認するのは政治家であるを知り、2010 年 11 月 9 日、州の保健大臣、地元選出議員にメールを出し、RCO メンバーにも同様のメ

ールを出すことを呼びかける。

第 19 章

州の保健大臣と議員に FOLFOX 承認を求めて嘆願

これに応じて RCO メンバーの多くが嘆願メールを出し始める。何十通ものメールを受け取った議員は、保健大臣に話してくれるという。Dr. Dorreen にもこのことを知らせる。

第 20 章

保健大臣から、調査を開始するという電話

ある薬剤が承認されるまでには、医療機関のチーム→がん療法小委員会→がん全身療法政策委員会 (CSTPC) →州政府に勧告→州政府が決定という手続きを経なければならない。以前にも同様の嘆願を提出した患者もいて、ようやく保健大臣のアシスタントから調査するという連絡があった。

第 21 章

野党の影の内閣保健大臣が関心を示す

友人の娘が野党リーダーの姪で、野党にも働きかける。野党の影の内閣保健大臣がこの問題に関心を示す。

第 22 章

人生最後のクリスマス？

インターネットで調べものをするうち、ある特定のリンパ節に転移のある患者の生存率は 4%だと知る。自分がそうだとしたら、これが最後のクリスマスになるのかと悲しみと恐れの中に息子の合唱団のクリスマスコンサートに出席する。

第 23 章

州政府は拒絶したが、さらにロビー活動を行う

2010 年 11 月 26 日、州政府は嘆願を拒否したが、RCO はめげず、さらに活動を続ける。野党が議会で Robin のケースを取り上げてもいいかというのに対し、承諾する。

第 24 章

気がかりだった腸骨付近のリンパ節に転移なし

恐れていたリンパ節への転移はなく、生存率は 50%とわかる。Dr. Dorreen は FOLFOX 使用について肯定的。

第 25 章

FOLFOX 承認に向けて正式手続き第一段階を開始

与党議員のおかげで、嘆願メールが州の薬剤サービス担当のトップ McPhee の手に渡り、FOLFOX 問題を取り上げることになる。McPhee と Dr. Dorreen との話し合いで、Dr. Dorreen が FOLFOX の正式承認プロセスを開始することになる。

第 26 章

FOLFOX 承認プロセスが第 2 段階へ

野党の影の内閣保健大臣は、嘆願メールの独自性に驚く。通常、嘆願メールは内容をコピーしたもののがほとんどなのに、RCO メンバーからのものはそれぞれが自分の言葉で書かれたいた。野党の支援もあって、2011 年 1 月 26 日、CSTPC が FOLFOX を推奨することを決定し、正式プロセスが 1 段階進む。

第 27 章

夫もがん？

Andrew のこめかみに膨らみができる。夫婦二人ともがんなのか？ Robin は鋭い痛みを感じて再発かと恐れる。Andrew は生検の結果、良性だった。Robin は CT 検査の結果、再発ではなかった。

第 28 章

化学療法の最終コースと副作用

化学療法の回を重ねるにつれ、副作用による衰弱が進む。心理的にも落ち込み、サポート・ケアを受ける。Andrew は休職期間が尽きて仕事に戻るが、新たな環境で仕事をせねばならず厳しい状況。Robin は、ストーマをフリッパーと名づけて、管理の大変さをユーモラスに語る。

第 29 章

4 医師告発の結果

医師会からの手紙が届き、Dr. One への告発は退けられた。他の 3 医師について、Robin は調査委員会の前で話す機会をもったが、感情的になってしまう場面もあった。結果は、4 段階ある処分のうち 3 番目に重い書面による警告となる。医師会と 3 医師を尊重し、この結果を RCO には投稿せず。

第 30 章

画像検査で転移なし

ストーマ閉鎖術前の診察で再発はなさそう。さらにサポート・ケアを求めてマインドフルネス療法のオンラインセミナーを受けたり、実行したりする。術前 MRI でも問題なし。

第 31 章

ストーマ閉鎖術を終え、退院

本人には内緒で Dr. McIntyre を卓越した患者ケア賞に推薦。2011 年 5 月 24 日、ストーマ閉鎖術を受け、退院時にストーマなしの自由さを味わう。

第 32 章

FOLFOX がノヴァスコシア州で直腸がんに承認されるが、Robin には遅すぎたがんセンターでの最後の診察時、Dr. Dorreen が FOLFOX が承認されたことを告げ、Robin の活動がなければ実現できなかったと喜ぶ。勝利は得られたが自分には間に合わなかった甘さと苦さを感じる。化学療法という種目も終わった。

第 33 章

心の治癒

直腸を失い、耐え難いほど頻繁な便通に悩まされる。Dr. McIntyre は賞を逃すが、Robin は最後の診察時、引退を数日後に控えた Dr. McIntyre に推薦書類セットを渡す。患者や看護師、同僚医師からの称賛を記した手紙に Robin 本人の手紙を添えた。この手紙を書くうちに、Robin は自分が癒されるのを感じる。医師の怠慢に苦しめられたが、救ってくれたのも医師だった。

第 34 章

回復は一進一退だが、再びクリスマスが迎えられた

正常に近い機能を取り戻すには何年もかかるかもしれないが、ゆっくりした回復の喜びとチャレンジを RCO と共に分かち合う。2011 年 9 月 19 日、内視鏡検査で局所再発なし、2011 年 9 月 30 日、50 歳の誕生日を迎え、2011 年 12 月には再びクリスマスコンサートに出席し、ハレルヤコーラスを喜びの涙と共に聴く。

エピローグ

その後

腸の機能の回復、がんサバイバーとしての心理療法を経て、2012 年、仕事を再開。治療終了の 1 年後から患者擁護活動に参加し、FOLFOX が標準治療となるのを目の当たりにする。不確実な自分の未来や死を思うとき、これによって救われた人々の顔を想像する。RCO コミュニティは関係性から得られる幸福を教えてくれた。

分析・感想・評価

心理学者 Robin McGee の大腸がん闘病記（実話）だが、闘ったのはがんだけではなく、医療界もその相手だった。闘病で一番の味方となるはずの医師がそれぞれ無責任で、診断が遅れて疾患が進行してしまうとは、患者にとって信じがたく耐えがたいことだ。カナダの医療システムの分業制度が裏目に出たとも言えるのではないか。日本では、一つの大きな病院にかかれば、臨床検査も画像検査もほぼその病院内でできる。ところが、カナダではこの検査はあの専門医のところで、こっちは検査はあのラボで、とあちこち巡り歩かねばならない。また機器が少ないからといって内視鏡検査の待ち時間が 8 週間がふつうだとは日本では考えられないことだろう。西側先進国でこのようなことがあるとは驚く。カナダでは国民皆保険制だが、医療サービスへのアクセスが容易でないのが大きな問題である。

著者は最初は不運だったが、そのためもあって、それ以降の自主性、積極性には目を見張る。もちろん、博士号をもつ心理学者として自身も開業していたり、公的文書の読み書きに堪能であったりといわゆる一般庶民とは一線を画すが、人任せにしない患者としての態度には見習うべきものがある。自ら求めて行動していかなければ、ベストプラクティスを得られる確率は低くなる。

また SNS の潜在力の大きさも感じられる。日本でも広く普及している SNS だが、このような有用な使用も広まることが望まれる。

著者は大学では英文学も専攻していたため文学作品からの引用もあり、また心理学者としての分析も興味深い。単なる闘病記にとどまらない深い内容がある。使われている英語は平易な文が多い。しかし、医学用語と日常会話的な表現には注意する必要がある。

全体として、共感を誘うがん闘病記であり、著者の行動力とユーモア、内省に感銘を呼ぶ文学作品であると高く評価する。

（通常、血液疾患も含めたがんはひらがな書きで、漢字の癌は固形癌に使われる。本シノプシスではひらがなのがんに統一した。）